

# Courtly Love Poem としての Chaucer の *Troilus and Criseyde*.

室 田 五 郎

## 1. 序 言

よく知られている如く、Chaucer の *Troilus and Criseyde* の直接の主要な出所は Boccaccio の *Filostrato* である。面白いことには、Chaucer の作品では Pandarus が詩全体を通じて、かなり個性化されているのに対し、Boccaccio の Pandaro はそうではない。Chaucer の作品に於ける Pandarus の性格は Chaucer 自身の発明なのである。私の考えでは Chaucer がこの独特な性格をとり入れたということは、重要な意味をもっている。彼 Pandarus は Courtly Love の象徴的人物である。彼は彼自身の経験に基づいて恋人達をどうやって最もよく助けることができるかを知っていると自負している類の人間なのである。F. N. Robinson が言う如く「彼 (Pandarus) が最も得意とする格言的な言葉によって言表わしている彼の人生評は気がきいてユーモラスである」。

更に私が考えるのは、Chaucer がこの人物を採用したのは Courtly Love についての Chaucer 自身の考えを伝えることにあったのだろうということである。言いかえれば、詩人 Chaucer は恋愛事件の中にある恋人たちを最もよく理解するだけの十分な知識をもっていることを示しつつ Pandarus を通じて語っているのである。そして Chaucer は、このことがその当時の読者の関心であり興味であることを知っている。

Courtly Love という考えは、もともとのちの時代によって与えられた名称であるが単に文学的な理想のみではなく、彼の時代では人々の間では実際の興味であったのである。<sup>①</sup>

Chaucer は Pandarus の行動を通して、Courtly Lovers に理想的な状況をつくり出す様に、この人物を利用したのかもしれないのである。このことは次のことで明瞭である。

即ち、Pandarus が Troilus と Criseyde の間の仲介役として働くことに熱心で、恋のよろこびと至福の完璧な絶頂に二人を速かに至らせることに一生けんめいであったが、彼の仲介者的な働きが、最初から Criseyde にとってはむしろ迷惑な位であった。

Pandarus は、これら二人の恋人たちを恋の有頂点にもっていくことに第一の興味があったことは自明のことであろう。それでは、Chaucer が悲劇的なテーマに同時に興味をもっていたということをどうして理解できようか。しかしここで忘れてはならないことは、彼が Courtly Love の考えを高くかかげていて、それを Pandarus に唱道させる様に仕組んだということである。Chaucer が Pandarus を通じて大いに語っているのは本当であるが、彼は彼自身の口でもっと多くを語っているのである。乃ち、詩人 Chaucer は人間性についての真理—Courtly Love に於ける “fearful lovers” の真理を見出すことに関心があるのである。

この詩をずっと読んでいくと、Chaucer は、唯単に機械的な態度で Courtly Love の ‘daunger’<sup>⑧</sup> の考えを追ってはいないことを全く容易に理解できるのである。そうではなくて、それを非常に注意深く、くりかえしているのは、そうすることによって恋愛に於ける人間心理の細かいすみずみまで明らかにしようとする態度があるからである。Chaucer 自身、彼の詩の中に於て、物語が悲劇的な方向に向かう少し前に、次の様に読者に言っている。

O, sooth is seyde, that heled for to be  
As of a fevre, or other gret siknesse,  
Men moste drynke, as men may ofte se,  
Ful bittre drynke; and for to han gladnesse,  
Men drynken ofte peyne and gret distresse;  
I mene it here, as for this aventure,  
That thoroȝ a peyne hath founden al his cure.

(III. 174 st.)

(人々がしばしば見る如く、熱があったり重病にかかった時に、人はうんと苦がい飲み薬を飲まなければならないと言われているのは本当だ；だから喜びを持ちたいなら、人はしばしば痛みと苦しみを飲まなければならないのだ。この冒険にとっても〔彼が〕苦しみを通りぬけて彼の癒やしを見出したということを私はここで真剣に言いたいのである。)

そしてここに我々は、恋愛の過程に於て非常に微妙でデリケートな悲劇的可能性を見出すのである。であるから人間性についての偉大な学者である Chaucer が Courtly Love に於けるその様な悲劇的要素を見のがさないのは不思議ではない。従って Courtly Lovers にとって恋愛理論が善意のテキストであるべきなのに、Chaucer はこれを、彼の恋の悲劇的展開に対する関心の為に、徹底的に利用しているということは全く皮肉なことである。もし彼が Courtly Love にハッピーエンドをもつ物語を書いたとしたならば、彼の ‘daunger’ とか別れの悲しみ等々は、読者の側に於ける興味と鑑賞をまさしく半減してしまったことであろう。

しかるにこれが悲劇であるので、二人の恋人たちの恐れや悲しみの一瞬一瞬が読者の心に大きな重みをもって思いかえされるのである。これが私がこの詩から感じている印象である。Chaucer が物語全体に恋の苦しみにおける異常なる重要性を与えていることが Courtly Love 理論に徹していることであると私は認める。

最後に、Chaucer が Courtly Love に於ける悲劇的テーマに関心を持ったかもしれないということは、ただ単に悲劇的テーマが人物の心理を験べるのに、より広い場を与えるからばかりではなく、Courtly Love それ自身、悲劇と懊悩の種をもっているからである。かくの如くして、Courtly Love の理論は Chaucer が恋人達の間における喜び、恐れ、疑い、悲しみのほんのちよとした動きをも、あらわにすることのできるという、人間心理の完全にして理想的なワクなのであった。

Chaucer は又、運命とか宿命とか等の Conventional な考えをも利用している。しかし我々は Chaucer は自分の目的の為には、彼の人間研究の為に有用であるならば、どんな一般的な哲学と理論でも使いこなせた偉大な学徒であったと思うべきであろう。であるから、それらがもつ表面的、乃至、一見して明瞭な意味を無視しても大したこともないと思われる。

## 2. TROILUS の側から

Troilus の Courtly Love に対する態度は、はじめ非常に不真面で浮薄であることは次の部分を見て明らかである。

I have herd told, pardieux, of your lyvyng,  
Ye loveres, and youre lewed observaunces,  
And which a labour folk han in wynnynge  
Of love, and in the kepyng which doutaunces;  
And whan youre prey is lost, woo and penaunces.  
O veray fooles, nyce and blynde be ye!  
Ther nys nat oon kan war by other be.

(I. 29 st.)

(お前たち恋人らよ、お前たちの生活や、お前たちのみだらな熱心さについては聞き及んでいるぞ、そして愛を得んものと熱心になり、そうしつつおどおどしていることよ。それにお前たちの相手がいなくなるとなげき苦しむことよ。ああ全く愚かな者よ。無知で盲であるがよい！ 他人が忠告したとて、利口になるものは一人もいるまいから。)

しかし、彼が Criseyde を見たあとで、彼の気づかないうちに、心の中に大きな変化が起った。その結果、Criseyde との恋慕に陥って思い悩み、夢中になっ

た彼は、見るからに傷々しいものとなった。そのことを Chaucer は自ら、

Yet with a look his herte wax a-fere  
That he that now was moost in pride above,  
Wax sodeynly moost subgit unto love.

(I. 229—231)

(しかし一目見て、彼の心は熱くなったので、たった今、高き誇りの絶頂にいた筈の彼が突然、恋の最も卑しき僕となった。)

と言っている。そしてこれが Courtly Love の理論が喜んで強調しようとする奇蹟なのである。即ちその不思議な力で、恋は人間の心に奇蹟を起すということなのである。Chaucer 自身、次の様に言っている。

Blessed be Love, that kan thus folk converted!

(I. 308)

(愛に祝福あれ、かく人の心を改むる故に! )<sup>⑧</sup>

この改心させられた Troilus は異性を愛することがどんなことであるかを充分に知り、以前よりも、同時に一そう幸福にもなり、一そう悲しくもなったことをさとののである。そして、

Thus took he purpos loves craft to suwe,  
And thoughte he wolde worken pryvely,  
First to hiden his desir in muwe  
From every wight yborn, al outrely,  
But he myghte ought recovered be therby;  
Remembryng hym that love to wide yblowe  
Yelt bittre fruyt, though swete seed be sowe.

(I. 55 st.)

(かくの如くして、彼は恋の手管を蒔くことにした。そしてひそかに、事を運ぼうと考えた。先ず、隠し場所に彼の計画をかくし、誰からも全く存在を悟らしめないでおく。しかし、それによって彼は、全く救われていることだろう。彼は大びらに恋をすると、たとい甘い種子を蒔いても、苦がい果実を結ぶことを知るからだ。)

そして彼の決心は完全に理論にかなっているのである。

But as hire man I wol ay lyve and sterve.

(I. 427)

(しかし彼女の男として、どこまでも生きそして死のう。)<sup>⑨</sup>

彼は毎日、彼女のことを思い、それによって彼は慰められる。

“Good goodly, to whom serve I and laboure,  
As I best kan, now wolde God, Criseyde,  
Ye wolden on me rewe, er that I deyde!  
My dere herte, allas! myn hele and hewe  
And lif is lost, but ye wol on me rewe.”

(I. 66 st.)

(「恋しき者よ、お前の為に力のかぎり、私はつかえ働く、今は伸に祈る、  
Criseyde よ、私を憐んでくれ、私が死なないうちに！ 私の愛するものよ！  
ああ私の健康も顔色もいのちも失われた、ただお前は私に憐みをかけてくれ。』)

しかし読者にとって残念なことであるが、悩みと、愛の献身のこれらの言葉は、未だに彼自身の独り言でしかない。それに、彼が彼女のことを思えば思うほど、更に怖れと疑いを己が身に積んでしまうのである。

Al was for nought: she herde nat his pleynte;  
And whan that he bythought on that folie,  
A thousand fold his wo gan multiplie.

(I. 544—6)

(すべては無駄なことだった；彼女は彼の嘆きを聞いていないからだ。だから彼はその愚かさを思うと、彼の悲しみは千倍にも積み重さなってしまう。)⑤

この段階に於て、彼と Criseyde の仲介の役を演ずる Pandarus がやってくるのである。

Pandarus と Troilus が長いこと言い争った挙句 Pandarus は Troilus がどんなことで思い悩んでいるのかを言わせてしまう。

Pandarus は続けて：

But I may nat endure that thow dwelle  
In so unskilful an oppynyoun  
That of thi wo curacioun.

(I. 789—91)

(しかし、お前の悲しみには癒し様がないのだなどと、へたな考えにお前がこだわっているというのは、私は我慢できない。)

Troilus は、めったに自分の悩みを打ち明けようとしないのに、Pandarus はしつこく、

And telle me plat now what is th'enchousoun

And final cause of wo that ye endure;

(I. 681—2)

(お前が堪えている悲しみの理由と根本的な原因を 今はっきりときかせなさい。)

という。Troilus は秘密をいつまでもおさえていくことはむずかしいと悟って愚かにも Pandarus に質問をする。

Allas! what is me best to do?

(I. 828)

(ああ、私はどうしたら一番いいのだろう。)

こんなことがあって結局 Troilus は Criseyde に対するひそかなる恋を Pandarus に打ち明けてしまったのである。

我々がここで不思議に思うことは、結局 Troilus 自身は自ら自分の恋を打ち明けて、彼女に求婚するだけの勇気がなかったのか、それとも Pandarus が恋愛事件のさ中にある彼を助ける為に、来るのが早すぎたのであろうかということである。我々はどちらの方にも考えることができる。ここで重要なのは、Criseyde から愛を得る迄に、又得たのちも、Courtly Lover にふさわしく、まじめであり、苦しみに堪えて来たということである。

しかるに、どうやら、いくら苦しんでも、彼は学ぶべきほどのことも学んではいないようである。というのは、彼はその態度に於ても意見に於ても大して生長がない。何故なら、それでも彼は利己的で、彼女が彼を愛すならば、彼女自身の名誉でもあることを、一度も口にしていないからである。彼は又、お互に名誉になることだという感覚も持ち合せていない。ところでこういう考えに至ったのが、実は Criseyde 自身であったとは、彼女、

“Al were it nat to doone,

To graunt hym love, ye, for his worthynesse,

It were honour, with pley and with gladnesse,

In honestee with swich a lord to deele,

For myn estat, and also for his heele.

(II. 703—707)

(たとえ、真実、彼が立派である故に彼に愛を与えようとしたのではないとしても大らかに、よろこんで、あの様な尊い方とまじめに交際ができるとい

うことは、まさに私の身分にしても、彼の幸運の為にしても、名誉あることだろう。

と言っているからである。それ故に、以上のことから間違いなく言えることは、Pandarus は Troilus が自ら恋を囁く充分な機会を奪ってしまったのであり、Troilus は未だに Pandarus の言うがままに行動することで満足しつづけていて、人生にもっと広い視野を持つに至らないのである。

Chaucer の作品に於て、二人の間に Pandarus がいなかったとしたら Troilus がどんな風に語り、行動したかは、想像するのが、むずかしいし、想像するのは無駄なことであろう。しかし Pandarus がいなかったら、Criseyde が Troilus の価値をためしたかもしれないが、Chaucer が何故それを Criseyde にさせなかったかを考えて見るのは、この詩を分析するのに無意味なことではあるまい。というのは、女性が男性の価値を驗することは Courtly Love に於て、決して不似合いなことではないからである。<sup>⑥</sup> 理由は、Chaucer 自身が Troilus をすばらしい騎士であることをすでに認めていたということであろう。更に Chaucer が Troilus の心理的転回を研究する目的に関する限り、彼は物語の中にこれ以上事件をひきおこす必要がなかったのである。彼は Troilus の心理に完全な光をあてる為の事件をすでに充分に持っているのである。この仮定に基いて、次の様に想像する。Chaucer が Criseyde に Troilus の価値を驗させなかった理由は、彼の関心が恋愛事件そのものの為に Courtly Love 理論に従ったのではなく Courtly Love に於ける心理に一そう強い重点を置いたからなのである。

先きのべた様に、Troilus は Pandarus の忠告や意見に従った。だが Troilus にとって Pandarus の仲介的働きが如何に重要であることか！

that day and nyght

This Troilus gan to desiren moore  
Thanne he did erst, thorough hope, and did his myght  
To dreessen on, as by Pandarus loore,  
And writen to hire of his sorwes soore.  
Fro day to day he leet it nought refreyde,  
That by Pandare he wroot somewhat or seyde;

(II. 192 st.)

(屋も夜もこの Troilus は、初めよりも、もっと希望をもって、欲望をもちはじめた。そして Pandarus が教える様に、どんどん自分自身の痛々しい悲しみを彼女に書き綴った。日を経るにつれて、彼は決して熱をさますことなく Pandarus に従って、とにかく、書いたり言ったりした。)

そして、この親切な Pandarus は何とか、かんとかして二人の主人公がはじめて会う為の準備を整えたのである。ところが一方 Courtly Lover らしく Troilus は熱にうなされて床についている。Troilus は Pandarus の意見に忠実に従い、恋人として完全な態度を示している Pandarus は Troilus に

For Goddes love, and kep hire out of blame,  
Syn thow art wys, and save alwey hire name.

(III. 265—6)

(神の愛の為にも、彼女の名をはずかしめないでくれ、お前は賢いのだから、彼女の名譽をいつも救ってやれ。)

と教えている。

Pandarus のはからいで、二人が会った以上は、とやかく言うのは殆ど不必要なくらいで、Troilus は言葉にも動作にも完全で、喜びと幸福に充ちている。だがしかし、しばしば心配やおそれがあらわれてくる。

lo, this was hire mooste feere,  
That al this thyng but nyce dremes were;  
For which ful ofte ech of hem seyde, "O swete,  
Clippe ich yow thus, or elles I it meete?"

(III. 1341—4)

(見よ、彼等はこんなことを一番おそれた。乃ち、このことすべては、ほんのおろかな夢ではないのかと。そんなことで、二人はお互に始終言った。「ああ、貴女よ、私は、貴女をこんな風に抱いているのだろうか、それとも私は、そんな夢を見ているのだろうか。」)

この至福の絶頂のあとには別れの悲しみが来つつあった。そして別れたあとでは、それぞれ二人は、夜よく眠ることができない。しかし愛における幸福は、恐れや悲しみよりずっと大きい。そして Book III は Troilus によって歌われる愛の讃歌で終わっている。しかし皮肉なことだが、この頂点のすぐ後で Chaucer は、Troilus と Pandarus の二人に容赦なき打撃を与えている。Troilus が

Lo, Pandare, I am ded, withouten more  
Hastow nat herd at parlement,—  
For Antenor how lost is my Criseyde?

(IV. 376—8)

(見よ、Pandare よ、私はもはや死んだのです。議会で Antenor の代りに私の Criseyde はいなくなってしまうということを聞きませんでしたか。)



というとき、彼はまだ、ひそかに Pandarus の忠告を期待していたに違いない。しかし Pandarus は少くとも、しばらくの間、絶望している。だが Troilus が  
呟やくので、彼はいろいろして、Troilus に向かって言う：

But telle me now, syn that the thynketh so light  
To changen so in love ay to and fro,  
Whi hastow nat don bisily thi myght  
To chaungen hire that doth the al thi wo?  
Why nyltow lete hire fro thyn herte go?  
Whi nyltow love an other lady swete,  
That may thyn herte setten in quiete?

(IV. 70 st.)

(しかし、愛していながら、始終ふらふらとするのが、お前にとっては何でもないことの様だから、私に答えてほしい。

お前にそれほど悲しみをひきおこす彼女の気持を変える為に、何故一生けんめい力を尽さなかったのか。何故、彼女をお前からよろこんで行かせないのか。

お前の心が平和におちつく様に、何故、もっとほかの、可愛らしい婦人を愛さないのか。)

これは、全く Pandarus が口をすべらせた、言い過ぎである。しかし、気を取りなおして Pandarus は Criseyde をまもる方法を言って聞かせる——乃ち、彼女と共に町から逃げ出せというのである。これに対して Troilus は反対で、彼は、彼女の騎士として、彼女の名誉を護らなければならないと言う。ここで彼等は、騎士として何を為すべきかについて全く意見がくいちがっている。

Pandarus の意見と忠告は：

Forthi tak herte, and thynk right as a knight,  
Thorough love is broken al day every lawe.

(IV. 617—8)

(だから、しっかりしなさい。そして騎士らしく考えなさい。愛により、日毎に、すべてのなわめが打ち破られるのだ。)

しかし、他方 Criseyde の意見はこうである。

The soth is this: the twynnyng of us tweyne  
Wol us disese and cruelich anoye;  
But hym byhoveth somtyme han peyne,  
That servety Love, if that he wol have joye.

(IV. 1303—6)

(事実はこうです。私たち二人が、別れ別れになっていることは、私たちを病気にし、残酷にさいなみます。しかし、愛に仕える者にとって、よろこびを得たければ、苦しみを持つことはあたり前のことです。)

Troilus は意見を変えて、次の様に言う：

For which, with humble, trewe, and pitous herte,  
A thousand tymes mercy I yow preye;  
So rueth on myn aspre peynes smerte,  
And doth somewhat as that I shal yow seye,  
And lat us stele away betweixe us tweye;

(IV. 1499—1503)

(その為に、へりくだった、真実な懼れおののく心で、千回も、私はあなたの慈悲を祈り求めます。ですから、私のはげしい苦痛のなげきにあわれみをたれて下さい。そして、私が言うようにして下さい。そして、私たち二人の間でこっそり逃げましょう。)

だが、彼女が：

Allas, ye sle me thus for verray tene!  
I se wel now that ye mystrusten me,  
For by your wordes it is wel yseene.

(IV. 1605—7)

(ああ、あなたは、こんな風に嘆かせて、私を殺してしまうのです！ あなたは、私を信用していないことがよくわかります。何故なら、あなたの言葉でもって充分にそうなのですから。)

というので、Troilus は全く立場がなくなってしまうのである。

Criseyde は、知らぬ間に、不幸な宿命を負ってしまっている。それは議会の決定によってきまったのである。言いかえれば、彼女の未来は、彼女自身のためではなく、他人の為に定められたのである。議会の決定に従わなければ、どうして彼女は自分の名誉を保つことができるであろうか。ところが他方、Troilus は、彼が悩む悩みと苦痛の故に、自分でどうしてよいのやらわからなくなっていた。そして今や、物語は Chaucer が Courtly Love の悲劇的要素そのものに、とりくまなくてはならない段階に來たのである。

Criseyde が言う言葉：

And over al this I prey yow,—

Myn owene hertes sothfast suffisaunce,  
Syn I am thyn al hol, withouten mo,  
That whil that I am absent, no plesaunce  
Of oother do me fro youre remembraunce  
For I am evere agast, forwhy men rede  
That love is thyng ay ful of bisy drede.

For in this world ther lyveth lady non  
If that ye were untrewre (as God defende!)  
That so bitraised were or wo-bigon  
As I, that alle trouthe in yow entende.  
And douteles, if that ich other wende,  
I ner but ded, and er ye cause fynde,  
For Goddes love, so beth me naught unkynde!

(IV. 235—6 stt.)

(そして、これよりもっと、私はあなたにお願いがあるのです。私の心の本当のよろこびである方よ、私はすっかりすべて、あなたのものですから。私がいなくなる間、他のどんな人がいて、たのしくても、私をあなたの思いから引きはなすことはありません。というのは、私はいつも、おそれおののいているのですから。何故なら、人々はよく、愛というものはいつも不安が絶えずあるものだと言っていますから。それにもしあなたが不真実であつたら(神様、そんなことがあつてはなりません!)この世の中に、私ほど、ひどく裏切られ、悲しく、みじめな女は他にいないでしょう。それほどすべての真実をあなたにささげています。疑いもなく、お互が行ってしまうときに、私は、ただ死に近づくのです。愛の神の為ですから、早合点して、私に冷たくなさらないで下さい!)

は二人がはなれている間に、双方の恐れや、疑いのおこる可能性を示したものである。事実、一寸見ただけでも、この始末におえない状況は、最も残酷なものである。ことに Troilus にとってはそうである。Chaucer は Troilus に同情して、彼に言う：

But Troilus, now far-wel all thi joie,  
For shaltow nevere sen hire eft in Troie!

(V. 27—8)

(しかし Troilus よ、お前のよろこびは、みんなさらばである。何故なら、お前は彼女に再び Troie で合うことは決してないからだ!)

しかし、この詩の本当のテーマは、彼が Troilus に同情をするということではなく、又単に物語が悲劇的に転回すること、それ自体にあるのでもない。悲劇を悲劇たらしめるものは Chaucer の考えでは、この Troilus の場合のように、人間の心理や判断を狂わせるところの恐れや疑いなのである。Troilus と Pandarus は Criseyde が彼等の手のほどこしようのないところに消えてしまったので、どうしてよいのか全くわからなくなっている。

Troilus は、はじめ Criseyde の約束を信じている。しかし同時に、彼が見た夢から、あわれむべき想像のとりこになって、疑いや、おそれによって混乱している。そして遂に、Criseyde との文通のあとで、望みを棄てるにいたるのである。

そして我々は Chaucer の本質的態度を、次の句に見出すのである。

Swich is this world, whoso it kan byholde:

In ech estat is litel hertes reste.

God leve us for to take it for the beste!

(V. 1748—50)

(これが世の中だ。見るものはよく見るがよい。どちらの状態にも安らぎがないのだ。神よ、それしも最善に受取ることをゆるし給え。)

### 3. CRISEYDE の側から

Criseyde が、Troilus が彼女を愛していて、その愛の故に非常に苦しんでいるということを、はじめてしたのは、Pandarus の話を聞いたからであった。Pandarus がこれを Criseyde にきかせたのは単に、知らせるということの為ではなかった。彼は最初から、明確な目的をもって、それを告げる為に来ているのである。それは Criseyde にとっては、おどろきであった。

Pandarus はむしろ脅迫的であり、強圧的である。それに直ちに決心をする様に求めて次の様に言う。

The noble Troilus, so loveth the,

That, but ye helpe, it wol his bane be.

Lo, here is al! What sholde I moore seye?

Do what yow lest, to make hym lyve or deye.

(II. 319—22)

(この高貴な Troilus が非常におまえを愛しているので、おまえが助けてあげなければ、彼は死んでしまうのだ。ごらん、これで全部言ってしまった。もうこれ以上何を言うことがあろうか。彼を生かそうと死なそうと、お前の好きな様にするがよい。)

そして又、

If it be so that ye so cruel be,  
 That of his deth yow liste nought to recche,  
 That is so trewe and worthi, as ye se,  
 Namooore than of a japer or a wrecche,—  
 If ye be swich, youre beaute may nat strecche  
 To make amendes of so cruel a dede.  
 Avysement is good byfore the nede.

(II. 337—44)

(もしお前が、あまりに残酷で、彼が死ぬことをかまうものかというのなら、彼はお前の知る様に、真実で、立派な方だから、お前は、もはや娼婦や魔女と変らない。もしお前がそんな女なら、お前が、どんなに美しくたって、その残酷な行いの埋め合せになるまいぞ。必要となる前にこそ忠告が大切なのだ。) ⑩

Courtly Love に於て、この様な不自然な仲介者の強制が公平に見て認められるものかどうか少し疑問である。しかしそれがみとめられる理由が何かありとすれば Pandarus が Criseyde の叔父にあたる という事実にあるだろう。そして Chaucer は、若い女性が、彼女の叔父の言葉や意見によって、自分自身の行動や判断に於て、どの様に反応を見せるべきか、ということに興味をもったかもしれない。しかも Chaucer は Courtly Love affairs に於て物語をリアリズムの筆をもっていくらでも長くすることはできたであろうが、しかし実際は、Chaucer がその詩にあらわそうとしたのは、リアリズム同様 Courtly Love を理想的に発展させることでもあった。又は、さもないと Chaucer は Courtly Love の中の女性達に批判的だったので、Criseyde に対して、親切ではなかったということにもなりかねない。とにかく、Chaucer が Courtly Love を讃美しようなどと考えたかどうか全く疑わしいものである。何故なら、彼が忠実に Courtly Love に従ったのは、当時の人々の考えに従ったからというのではなくて、恋人達の 'happy end' の考えにさからう結果になろうとも、否かえてそういう結果に向かえば、その理論が、人間性研究の為には realistic で心理的に緻密な text であると見たからである。Courtly Love を扱う際のこの態度は、詩中いたるところにうかがえるのである。

疑いもなく Criseyde の感情は、叔父の為に不愉快なものとなっている。彼女は彼が言うことに関心がなく、むしろかえて、それが為にうんざりさせられている。したがって、彼女は騎士を愛することに全然興味がいないのか、又は Courtly Love に於ける女性によくある様に、その場で決心することをちゅうちょしているからであろう。しかしそれにしても、彼女は彼女の相手でもない男性を困らせ

ることは不本意なことであろう。しかるに Pandarus が彼女を大げさに非難しているのは、注目に価する。

しかし、Pandarus がうまく説きつけたあとでは、彼女は未だ見ぬ騎士に思いを馳せて、立ち上り、彼女の恩恵と憐みなしには死んでしまいそうな、その騎士に対して申し訳ないと感じている。彼女は、ついに、かたく決心をして言う：

But natheles, with Goddes governaunce,  
I shal so doon, myn honour shal I kepe,  
And ek his lif,

(II. 467—9)

(しかしながら、神の御導きをもって、私はその様にいたしましょう。そして私の名誉を保ち、且あの方の命をもおさえしましょう。)

この決心は、不自然ではないとしても少し早すぎる様に思える。というのは、彼女が遠くから、彼をはじめて見て、Troilus に愛を感じたのはこのあとのことだからである。その時彼女は一人言のように言う：

Lo, this is he  
Which that myn uncle serith he moot be deed,  
But I on hym have mercy and pitee.

(II. 653—5)

(ほら、この方が、私が慈悲とあわれみをかけなければ死んでしまうにちがいないと、私のおじさんが言った、あの方なのだ。)

読者は、詩人の言う様に、一人の女性が一目見て恋をするということが充分あり得るということ、及びここではそれが理解できる realism であることを認めるであろう。それならば Chaucer が言い訳の様に

Now myghte som envious jangle thus;  
“This was a sodeyn love; how myght it be  
That she so lightly loved Troilus,  
Right for the first syghte, ye, parde?”  
Now whoso seith so, mote he nevere ythe!

(II. 666—70)

(今では誰かが、うらやましがって言うだろう：「これは唐突な恋だ。どうして彼女がそんなに軽々しく Troilus を愛したのだろうか。しかもたった一目見ただけでとは。」さあ、そんなことを言う者は、みんな大した人間ではあるまい。)

といっているのは何故だろうか。Chaucer は丁度 Pandarus の様に、実際必要でもないのに、読者にも強制しているのではないのだろうか。私の考えでは、これは Chaucer が、自ら、先に未だ見ぬ Troilus を Criseyde に愛させたことを読者が考え直して、それは realistic ではなかったではないかと疑問を持つことを、さげさせようとした煙幕の様な気がする。しかし読者として、この点を、わざわざ問題にしなくても不都合はなかろうという事に私も賛成である。とにかく、ここには、歪められた何かがあると思うのである。

Criseyde は Troilus が立派な、名誉ある騎士であるので、心の中でほっとするのである。彼女は言う：

It were honour, with pley and with gladnesse,  
In honestee with swich a lord to deele,  
For myn estat, and also for his heele.

(II. 705—7)

(訳文 (6)―(7)ページ既出)

しかし猶、Criseyde は誰とも愛することをおそれている。だが彼女は、彼女の姪の愛の讃歌にはげまされるのである。それでも彼女は、彼女の叔父が Troilus からの手紙を出すのを見、それを受け取ろうとしないので、彼女の叔父を失望させてしまう。Pandarus は、彼女を責め、その手紙を彼女の胸にねじこんで “Now cast it away anon” (さあすぐにそれを棄ててみなさい II. 1156) という。これは Pandarus の Criseyde に対する新たな脅迫的態度である。だが同じ Pandarus は次の瞬間に於ては、

—held his hondes up, and sat on knowe;  
“Now, goode nece, be it nevere so lite,  
Yif me the labour it to sowe and plite.”

(II, 1202—4)

(自分の手を挙げて、ひざまずき、「さあ、姪よ、そんなに軽々しくしないで、私に文通のやりとりの労働を任せてくれ」)

と言って突然、へり下った態度になって懇願するのである。

かくの如くして、彼女は叔父のたのみによって Troilus の手紙に返事を書くのである。明らかに、彼女は自分でやってしまった事にいや気がさしてしまう。

I nevere did thing with more payne  
Than writen this, to which ye me constreyn

(II. 1231—2)

(私はこの手紙を書くことほどに、苦しい思いをしたことはありません。あ

なたはそれを私に強いたのです。)

しかし Pandarus から言わせれば Criseyde は Troilus に対して

—played the tirant neight to longe, (II. 1240)

(あまりに長い間、暴君を演じた)

のであり、又

—lakked routh (II. 1279)

(憐みに欠けていた。)

何故なら Troilus は、彼女の無情さの故に、罪もないのに死んでしまいそうだからである。

Book III に於て、彼女は、彼女の叔父の家を訪れたのであるが、彼女に対する愛の故に Troilus の容態が手のほどこしようがないという話を聞かされて、彼女は叔父に言う：

Wol ye don o thyng,

And ye therwith shal stynte al his disese?

Have heere, and bereth hym this blewe ryng,

For ther is nothyng myghte hum bettre plese,

Save I myself, ne more hys herte apese;

And sey my deere herte, that his sorwe

Is causeles, that shal be sene to-morwe.

(III. 883—9)

(一つのことをなさって下さい。そうすれば、彼の悩みはたちどころに消えます。聞き入れて下さい。乃ちこの青い指輪を彼にもって行って下さい。というのは、これより他に、彼をよろこばせるものはないからです。私以外に、彼の心はもはや和らぎがないのです。そして私の恋人にあなたの悲しみは無意味であると、そして明日私が会ってあげますと伝えて下さい。)

しかし、Pandarus は、彼女の言葉にひどく気嫌をそこねて言う：

And forthi, nece, er that his herte breke,

So speke youreself to hym of this matere;

For with o word ye may his herte stere.

(III. 908—10)

(だから姪よ、彼の心臓が破れないうちにこのことを自分でいってその様に伝えなさい。というのはお前は、たった一言で彼の心を動かすことができる



からだ。)

Chaucer がここで彼女のしたいことをさせないというのは、彼自身は Courtly Love の女性に同情がうすいからであると考えたくなる。それとも Chaucer は Criseyde が Troilus に対して残酷になるのが我慢できないのであろうか。

少くとも、Criseyde は Pandarus の短気に迷惑し、かつ困惑していることは認めなければならない。彼女の態度は Courtly Love の基準からすれば、現代の読者から見ると、大して冷たいものでも不自然なものでもないのである。言いかえれば Chaucer はこれまで、Courtly Love の中に承服できない conventional なものを感じ、彼独自の humanism をもって立入っているのである。従って、彼が、仲介者を Criseyde の叔父にした意味は深いのではなからうか。

とにかく Troilus と Criseyde の間の恋の頂点は Pandarus の仲介者的働きによって、せっかちに遂げられたのである。Troilus にとっては、幸いなことであったが、Criseyde にとってはあいにくなことであった。しかし恋の絶頂そのものが二人にとってよろこばしいものであることは言うまでもないことである。これまでの経過には、かなり不自然なものがあるけれども、Pandarus がやった事は、彼女をして、彼の意に楯つく結果にならなかったわけだから、まず良かったと考えられよう。とにかく、彼女は、これまでのところ、彼女の叔父に従順である。

幸いにして、恋人二人共、互に会ってからずっと完全な恋を楽しんで来た。Criseyde は彼を非常に愛して、議会の決定によって、彼女が、自分の意に反してギリシア陣営に行かなければならないときまった後で Troilus に会った時、卒倒して仮死状態になったほどであった。その後、彼女は議会の決定に従う決意をした。それは Troilus と Pandarus の二人にとって大変な失望であった。読者は彼女の決意を責め、彼女の Troilus に対する愛情を疑うであろう。しかし私の考えでは、彼女は真剣であり、まじめであった。何故なら、彼女は十日以内に帰ることを約束しているのである。だが、読者はそこで、彼女のまじめさの本質をうたがうかもしれない。しかし Chaucer の関心は、むしろここにあるのではなく、彼は、彼女を「止むを得ない」という態度をした為に、大へんなことをしたということのをのちになって自覚する様な女にすることに、ずっと大きな関心があったに違いない。何故なら、作者は、彼女から、自分の不満を議会に訴える充分な時間を奪ってしまっている。彼は又、この事件が二人に圧倒的な力とさせる為に、議会の決定について Troilus を全く啞の様に無言たらしめているのである。

かくの如く、作者は、この事件を不可抗力たらしめて、二人の恋人たちを、忽ちのうちに、別離の悲しみへ追いこんでいる。そして我々は、Chaucer が二人の恋人たちの心にある残酷にして痛々しい心理のあらゆる面をくまなく験べている

のを理解するのである。Criseyde は Troilus に溜息をついて言う：

Allas, ye sle me thus for verray tene!  
I se wel now that ye mystrusten me,  
For by youre wordes it is wel yseene.  
Now, for the love Cinthia the sheene,  
Mistrust me nought thus causeles, for routhe,

(IV. 1605—10)

[初め 3 行の訳文(10 ページに既出)]

(輝ける Cinthia の愛の為にねがいですから、私をこんな風に理由なく誤解しないで下さい。)

我々は少なくとも、ここに於ける Criseyde の真剣さを疑うことはできない。ただし、彼女は、手おくれになってから、二人の悲しみの結果となる様な重大なことを犯してしまったことを悟るのであろう。そしてここから、Chaucer は彼の詩人としての同情をかたむけつつ熱心書きつづけるのである。

Diomedes が彼女に求婚した時、彼女は初め誘惑されなかった。しかし彼女は、彼女の心の中で筋を通して考えた：

syn I se ther is no bettre way,  
And that to late is now for me to rewe,  
To Diomedes algate I wol be trowe.

(V. 1069—41)

(よりよい方法が見つからないし、今では私がなげいたとしても、おそすぎるので Diomedes にとにかく真実をつくそう。)

そして Diomedes に彼女は言う：

And certes, yow ne haten shal I nevere,  
And frends love, that shal ye han of me,

(V. 1079—80)

(たしかに私は、あなたを憎むことはしません。それに、あなたは友情としての愛を私から得るでしょう。)

彼女が Diomedes に彼女の友情を与えても誰が非難するであろうか。しかしそれは Troilus に対する、彼女の行動の弁解ではある。しかし Chaucer は Criseyde が情落した女と見えない様にする為に何か言い得ることがあるだろうか。これは Chaucer にとって、いわば dilemma である。というのは Chaucer は、はじめから彼女を情落する様な女にするつもりはなかったからである。

たしかに、詩の中で、Criseyde はある程度悲劇的人物になっていることは次の

引用からわかる。

Thoroughout the world my belle shal be ronge!  
And wommen moost wol haten me of alle.  
Allas, that swich a cas me sholde falle!

(V. 1062—4)

(全世界中に私の鐘がなりひびき、大部分の女性が私を憎むだろう。ああ私の事情が、そんな風になっているとは！)

しかし Chaucer は自から、彼自身の言葉でつけ加えなければならなかった：

Ne me ne list this sely womman chyde  
Forther than the storye wol devyse.  
Hire name, allas! is punysshed so wide,  
That for hire gilt it oughte ynough suffice.  
And if I myghte excuse hire any wise,  
For she so sory was for hire untrouthe,  
I wis, I wolde excuse hire yet for routhe.

(V. 1093—9)

(私はこの幸福な女性を、物語が告げる以上に、責めたてるとは私の好むところではない。彼女の名は、あまりにも広く罰を与えられているので、彼女はもう充分にその苦しみを味わっている。そしてもし私が、彼女を何らかの意味でゆるすとすれば、というのは彼女は自分の不真実を残念に思っている、私は彼女を猶憐む故にゆるすだろう。)

Bysechyng every lady bright of hewe,  
And every gentil womman, what she be,  
That al be that Criseyde was untrewed,  
That for that gilt she be nat wroth with me.

(V. 1772—8)

(美しい御婦人方、及び、どんな身分にせよ、高貴な女性方すべてに訴えます。あの Criseyde は不真実であったが、その罪の故に、彼女は私を怒らせてはいないのです。)

何故 Chaucer はこんなに Criseyde を弁護するのであろうか。彼が Criseyde を弁護した時に、彼は Courtly Love に於て、女性が、男性よりも大きな自由をもっていること、乃ち、Troilus が Criseyde よりもはるかに痛ましく苦しみ、又恋愛事件中は Troilus よりも Criseyde がずっと自由であったということを頭

にかへていたにちがいない。Courtly Love に於ては、lover は女性よりも個人的に悲劇的存在となる可能性が強いの、読者が、恋愛事件の悲劇的結末の責任を女性の側に向けることが、むしろ予想されることとして、あり得るのである。しかし Chaucer は Criseyde を彼の物語の中では悪玉にしたいわけではないのである。それ故に、我々は Chaucer が Criseyde に対する態度に於て、片寄っていると考える必要はない。むしろ彼の強調点は、彼の人物達を人生そのものの様に生き生きとさせることにあるのである。

#### 4. PROLOGUE と EPILOGUE

私はエッセイの結びをする前に Chaucer が何を試みようと思図したのか、そして詩の最後に於て、結局何を証明することになったのかを見てみたい。この詩に於て、彼が目的としたことは 'double sorwe of Troilus' (I) であることはいうまでもない。彼が純粹に、Courtly Love の本質の深さにふれようとしたことを認めることができる。しかし又、彼が Courtly Love 物語に理論が堪え得ないほどの重い或る重要性を負わせることによって、彼が人間性研究をしようとしたことを我々は理解すべきである。そして真に悲劇的なものを得ようとして、Chaucer は、彼の詩人としての態度と物語の中の説明を、Courtly Love 理論に於ける感情と態度の慣例に合わせるように試みたのである。Chaucer は、この理論を人間性研究に充分に役に立つ機能をもっていると解釈したのである。いけると、彼の主要な関心は、Courtly Love に於ける悲劇的可能性を発展させ、ふくらませることにあり、その可能性を用いて Troilus と Criseyde の間の悲劇的過程を心理的に正確に書き、人生そのものの様に生き生きと書いたのである。しかし Epilogue の中で、詩人は叫んでいる。

Lo here, of payens corsed olde rites,  
Lo here, what alle hire goodes may availle;  
Lo here, thise wrecched worldes appetities;  
Lo here, the fyn and guerdoun for travaille  
Of Jove, Appollo, of Mars, of swich rascaille!  
Lo here, the frome of olde clerkis speche  
In poetrie, if ye hire bokes seche.

(V. 1849—55)

(見よ、苦しみのつき透る古きならわしを、  
見よ、彼らの神々が何を果し得たか、  
見よ、これら墮落せる世の欲望を、  
見よ、ジョーヴとアポロとマーズと一連の輩の苦勞の果てと報酬とを、  
見よ、あなた方は学者達の書を調べれば学者たちは詩の中で何を語ってい

るか。)

いいかえると、彼は詩の最後に於て Courtly Love 理論の価値を否定し、重要性を疑うところまで来てしまったのである。しかし何故であろうか。或る人は、この詩の Epilogue は詩物語全体に対して矛盾するものだと言うだろう。そう考えるのは或程度迄あたっているのである。しかし Chaucer はそうせざるを得なくてそうしたのだらうと思う。といっても彼が自ら、道徳的に立派な人間であるからそうしたと必ずしもいうわけではない。然し乍ら、要するに、悲劇を生々しくしようとしたが、彼が自分自身の悲劇詩に図らずも感動してしまったとも言おうか。又こんな風にも考えることが可能である。彼が Courtly Love 理論によって Troilus の魂を死期の近づくにつれて清化することによって悲劇を書き終えたとき、彼は Criseyde に Troilus ほどに純粋な、高潔な人格を与えることができないことを発見した。我々は Chaucer が Criseyde の弁護をくりかえしているのを忘れるべきではない。彼は読者が Criseyde を誤解して、墮落女と考えはしまいかとおそれているのである。これは、彼自ら予想しなかったことで、彼は怒りをすら感じてしまったのであろう。

「この悲劇の何処に問題があるのだろうか」というのが彼自らが持った疑問であるに違いない。もし、彼がこんな予想もしない感じを持つ結果にならなかつたら、この疑問は大して重要ではないとしたであらう。彼は、Courtly Love 理論に罪を帰すべきであると考えた。しかし詩を書き乍ら、彼の感情に思わぬ結果をもたらしたものは一体何であつたらうか。それは皮肉なことに Chaucer が、忠実に追った「恋愛の清化作用」だったのである。

Troilus を終りにかけて清化し、気高いものにしたあの作用を、彼は責めることができるだろうか。否である。しかるに猶、彼は、愛の理論によって Troilus と Criseyde の間に残念乍らひきおこされた強い Contrast を無視するわけにいかなくなった。

彼は、其処からもっと深く、くい入って問題を究明しようとした。そして Courtly Love は 'blind lust' に基いていることをめざとく悟つたのである。ここに於て、Chaucer は Troilus に自らを責めさせているのである。

And in hymself he lough right at the wo  
Of hem that wepten for his deth so faste,  
And dampned al oure werk that foloweth so  
The blynde lust, the which that may nat laste,  
And sholden al oure herte on heven caste.

(V. 1821—5)

(そして彼は心の中で、彼の死を夢中になって悼んで悲しむ人々のなげきを

真向から嘲笑して、盲目なる慾望にあれほどに従ったわが労作のすべてをのしった。盲目なる慾望は、長くは続かず、我々はすべて心を天に向けなくてはならない筈だ。）

しかし猶、Chaucer は Troilus の叫びを終らせることなく、それによって Troilus の清化された人格と Criseyde の不信実な人格との間の Contrast を一そう強くしてしまっている。こうすることが、かえって Chaucer 自身その悲劇的な現実性を更に深く見ることにのみ、役立っているのである。いわば、彼は Troilus 自身の心の中に一そう深く立入っているのである。そして我々は、彼が、悲し気に胸を打つ様子を見るのである。即ち、

Swich fyn hath, lo, this Troilus for love!

(V. 1828)

(見よ、Troilus は、恋に生命をかけてこんな結果になっている。！)

しかし Chaucer が Courtly Love を否定してみても Troilus の魂を救うことには全然ならない。それどころか、それはかえって、更に一そう、彼を欺き、彼を破滅させることになる。何故ならば、彼が悲劇的結末になったのは、愛の為だったからである。しかし、

whan that he was slayn in this manere,

His lighte goost ful blisfully is went

Up to the holughnesse of the eighth spere,

In convers letyng everich element;

And ther he saugh, with ful svysement,

The erratik sterres, herkenyng armonye

With sownes ful of hevenyssh melodie.

(V. 1807-13)

(彼がこの様な状態で殺された時、彼の軽い靈魂は祝福に充ちて、あらゆる要素が逆に動いている第八天のくぼみにまで昇っていき、そこで彼は熟視して、さまよう星群を見た。そして、天の調べに充ちた音のハーモニーに聞き入った。)

Chaucer は、彼を救う唯一の道は、彼が知っているキリストの神の愛でしかないと考えたに違いない。それとも Troilus の魂が Courtly Love の宗教に殉教したために至福なる天国に来たと、一体言うことができるであろうか。否である。何故ならば、

in hymself he lough right at the wo

Of hem that wepten for his deth so faste;  
And dampned al our werk that foloweth so  
The blynde lust, the which that may nat laste,  
(V. 1821—4)

(訳文既出)

おかしいことに、次の行は 'shlden al oure herte on heven caste' となっているが、Troilus 自身がキリスト教の神に果して従ったかどうか全然わからない。しかし、神に思いを向けたのは、詩人 Chaucer 自身なのである。

O yonge, fresshe folkes, he or she,  
In which that love up growth with youre age,  
Repeyareth hom fro worldly vanyte,  
And of youre herte up casteth the visage  
To thilke God that after his ymage  
Yow made, and thynketh al nys but a faire  
This world, that passeth soone as floures faire.

(V. 1835—41)

(ああ若い、みずみずしい者たちよ、男であれ女であれ、年につれて恋心が生長してくるものだ。世の無益なことから家に帰るがよい。そしてあなた達の心の眼をあなたたちの像（かたち）が神のかたちにかたどって作られた、その同じ神に投げかけなさい。そしてこの世のことはほんの必要なだけ考えなさい。この世は、美しい花ぐらい早く過ぎ去ってしまうのだから。)

Troilus は、神を知らないことになっているし、だから悔改めた筈もない。彼はキリスト教の神にはいっさいふれていないのである。それ故この物語は1834行で終わっていて、それ以下は Chaucer の個人的意見なのである。ただ Chaucer は彼の満足の為に自分の意見を物語につけ加えないと気がすまなかったのである。

註 ① I 「それ (Courtly Love) がどの程度まで中世の社会で行なわれていたかは議論のあるところである。しかし、文学に示されたのと同様にそれは、その理想的な面がないわけでは決してなかった。疑いもなく Courtly Love の理想は中世に於ける生活を洗練されたものにするのに事実貢献をなしたのである。」

F. N. Robinson (ed.) *The Works of Geoffrey Chaucer*. Houghton Mifflin Company: Boston Second Edition p. 388.

II 心理的な恋愛の説明をもって Andreas は当時の好みと状況にマッチするように変化した、感情と態度の code を説明しているのである。この様に、定義された、恋愛に、又それに伴う説に対して、のちの時代は Courtly Love (宮廷恋愛) という名

を与え Andreas の論文は Courtly Love の理論の最も重要なものである。

Aberystwith: *Selected Middle English Poems of Courtly Love*. University College of Wales. 1959. p. 1.

- ② 女が男に対して、どんな態度をとるにしても、恋人(男)は永久に忠実でなければならない。彼が残酷な女性の為に身をほそらせる間、彼は女性の——daunger にある(in daunger)といわれた。

Aberystwith: *Selected Middle English Poems of Courtly Love*. University College of Wales. 1959. p. 3.

- ③ フランス北部の Troubadours の詩や, Trouveres の詩は、根本的には不純なものであり乍ら、人に何か気高い人格を吹き込み、愛する女性を通じて一つの深い経験を与えたのである。何よりも Courtly Love の著しい性格を構成しているのはこの人格を変える力なのである。そしてこの恋愛は文学上のテーマとしても又、社会上の理想としてもヨーロッパの舞台では、何か全く新しいことなのである。そして現代に於ける romantic love の考えは、大部分ここから出ているのである。

Frederick W. Locke (edited and abridged) *The Art of Courtly Love-by Andreas Capellanus*. p. vi. Frederick Ungar Publishing Co. New York. 1957.

- ④ lady につかえることにより Love に仕えることになる。(Lady は男に命令を下し、男は恋の僕として全力をつくさなければならない) Andreas Capellanus p. 81.  
John Jay Parry: *The Art Courtly Love-by Andreas Capellanus*. p. 81.  
Columbia University Press New York. 1941.

Quoted in *Selected Middle English Poems of Courtly Love*.

- ⑤ 実際のところ、一人の恋人(男)の恐れは誰も数えることができない程である。この種の恋は、二人のうちの一人のみによって感じられている、そして “single love” と呼ばれることができる。Ibid. p. 2, 3.

*The Art of Courtly Love*. ed. FW Locke.

- ⑥ たとえ男がすぐれた特質をもっていて、あらゆる名誉にふさわしいものであっても、女はたやすく恋をゆるしてはならない。どんな性質の女でも、男の希望をはやく与えないこと。というのは速やかに与えると、男はかえって、ばかにするし、せっかく一生懸命、求めたものが安っぽくみえる：一方、にせものの恋でも、不純なものも長い間、恋が達成されないと、かえって純化されて行く。だから女は、テストを課して、男の性質をみきわめ、彼が正直であることをたしかめるべきである。Ibid p. 132.
- ⑦ もしあなたが、私を恋の希みなしに送りかえすなら、あなたは私を早死させる様にしたのであって、あなたが、あとで手を施しても効果はなく、あなたは common homicide と呼ばれるだろう。Ibid p. 67.